

加納城跡 ～縄張りとの丸の調査～

加納城は関ヶ原合戦直後の慶長6年(1601)、大坂方への抑えの城として、徳川家康が現地を見分し、本多忠勝に築城を命じたといわれています。その場所は、戦国時代に守護代の斎藤氏が築いた加納城(中世加納城)の跡地でした。初代城主は家康の娘婿である奥平信昌で、以後大久保、戸田、安藤、永井と譜代大名が歴代の城主を勤めました。

城は東と南は荒田川、北は清水川に囲まれ、唯一地続きとなる西には長刀堀(なぎなたぼり)を掘って、水に浮かぶ城という景観をしていました。城の大手門は中山道に面し、三の丸、厩曲輪(うまやぐるわ)、二の丸をジグザクに通って本丸に至るよう設計され、さらに本丸の南には大藪曲輪(おおやぶぐるわ)が造られました。現在は全ての堀が埋められていますが、本丸の石垣と土塁、堀の痕跡、二の丸北の石垣、三の丸の土塁の一部などが残っており、当時の姿を偲ぶことができます。

二の丸には歴代城主の御殿があり、北東の角(現在の岐阜地方气象台)には岐阜城から移築されたといわれている「御三階」櫓(やぐら)が建っていました。二の丸御殿の絵図は複数のものが残っています。発掘調査でも造成を繰り返していることが分かっており、このことから何回も建て替えをした可能性が高いと見られます。

平成12年度の発掘では、17世紀前半のゴミ穴が見つかり、中には食物の生ゴミと見られる多量の貝や骨が捨てられていました。分析を行ったところ、貝ではハマグリ・アサリ・サザエ・アワビなど、骨ではアユ・コイ・タイ・サワラなどの魚やニワトリ・カモ・キジ・ツルなどの鳥のほか、カワウソもあり、当時の大名の食生活を伺うことができます。

遺構としては、御殿の一部と見られる柱を支える礎石(そせき)が見つっています。

また底を打ち欠いた常滑産の甕を積み重ねた井戸も出土しました。現在は埋没しているため見ることはできませんが、東側の石垣の一部や厩曲輪と繋ぐ橋の石垣も出土しており、当時の二の丸の範囲も確定しつつあります。



二の丸御殿の礎石

加納城跡 ～本丸の発掘～

昭和 58 年に本丸跡が国の史跡に指定されてからこれまでに堀の部分で 8 回、本丸内で 5 回と計 13 回の調査が行われ、色々なことがわかってきました。

平成元～2 年度に行った調査では、本丸南門の南の堀から江戸時代初め頃の遺物が大量に出土しました。これらの遺物は本丸内から運び出された土の中に入っていたもので、築城当初の本丸御殿の存在をうかがわせるものです。また、南門の内枡形（うちますがた・鍵型に折れ曲がる入り口）の西端を区切る石垣の一部が見つかりました。

平成 11 年度は絵図には描かれていても現在はその痕跡が残っていない南門の本丸内の調査を行いました。その結果、失われている内枡形の土塁や石垣、通路の跡が見つかり、平成元～2 年度の調査と合わせ南門枡形の規模がわかってきました。また、通路部分には門に使われていたと思われる瓦がまとまって捨てられていました。

平成 16 年度及び 17 年度の調査では本丸出枡形（でますがた）の北側の堀で堀障子（ほりしょうじ）という堀底に造られた格子状の畝（うね）が見つかりました。これまで行った堀の調査でも堀底中央部分の高まりは見つかっていましたが、この調査でそれが堀に平行する畝であることが分かりました。また、本丸の石垣に近い堀底には焼けた瓦を含む大量の瓦が捨てられていました。本丸内で火災があったことをうかがわせます。

平成 19 年度には本丸大手門出枡形内の調査を行いました。ここでは櫓門（やぐらもん）に接続する石垣や門の柱を支える礎石が見つかり、櫓門の位置を特定することが出来ました。このことから平成 12・13 年度の調査で見つかった 2 本の平行する溝が櫓門の雨落ち溝であることがはっきりしました。また、枡形内の石垣も今まで一部が見えていた南辺石垣の続きや東・西の石垣の一部も確認することができ、加納城の特徴でもある出枡形の規模や構造が少しずつ明らかになってきています。



平成 19 年度調査で見つかった櫓門の礎石